

本稿は、法律を学ぶ学生からの企業法務についての素朴な質問に、法務パーソンが答える座談会です。経営法友会会員外へ本稿を WEB 公開することで、将来の法務業界を担うかもしれない学生の皆さんに、企業法務のことを少しでも知ってもらい、将来の法務人材の裾野拡大に貢献することを目的としています。

近年、司法試験受験者や法学部志望者の減少が課題として指摘される一方で、企業における法務機能の重要性、および法務人材への需要はむしろ高まりを見せています。また、大学で学ぶ法学と実社会、特に企業法務の現場における法務実務との間には、少なからず乖離があるのが現状です。

本稿を読んだ学生の皆さんが企業法務のリアルな姿やその奥深さに触れ、学術と実務のよい意味での「ギャップ」を体感することで、企業法務への具体的な興味・関心を深めてもらうことを願っています。

座談会参加者

■学生

Xさん・Yさん

都内の大学に在学中の4年生。企業法務に強い関心を持つ。

■法務パーソン（50音順）

内田一伸

株式会社日本マイクロニクス 法務・知財部 法務グループ

2019年に慶應義塾大学大学院法務研究科を修了後、株式会社日本マイクロニクスに入社。法務グループへ配属後、契約書審査、法律相談、社内規程、社内教育を担当している。

大澤文人

株式会社ニトリホールディングス 法務室 リーガルチーム リーダー

2012年に北海道大学法学部を卒業後、株式会社ニトリホールディングスに入社。約9年間にわたり店舗・現場業務を経験した後、2021年より法務室に配属される。現在は契約書審査や社内からの法律相談対応などに従事している。

岡本 カ

株式会社シーエーシー 法務コンプライアンスグループ

2021年に早稲田大学大学院法務研究科を修了後、株式会社シーエーシーに入社。入社後すぐに法務コンプライアンスグループに配属される。現在は契約書審査、法律相談、取締役会、株主総会、社内規程やM&Aなどに広く従事している。

座談会スタート！ 「法務部門って、どう見えてる？」

座談会は、「学生のお二人から見た法務部門の『解像度』について、率直なご意見をお聞かせください」という、法務パーソンの問いかけからスタート。法務部門が「閉鎖的でとっつきにくい」と思われがちで、それが法務人材の不足に潜在的につながっている現状に懸念を示し、学生のお二人の率直な意見を求めました。

Q 1 企業によって仕事内容が全然違うって本当ですか？

Xさん：いろいろな企業の法務部門の話を聞きましたが、正直なところ、「企業によって違いすぎてよくわからない」というのが率直な感想です。たとえば営業職だと、どの企業もある程度仕事内容が共通するイメージですが、法務職の場合は企業ごとに全然違うように見えました。

大澤：私たちからすると、実はそんなに違いはなく、共通項が多いんですよ。契約書チェックもガバナンスも、どの企業でも法務部門であれば必ずやります。

内田：基本的な業務はどの企業でも大きく変わらないと思います。ただ、事業内容によって特徴が出ることはあるようです。たとえば商社だと、会社を買ったり、さまざまなものを売り買いしたりするので、法務部門も交渉に参加する機会が多いという話を聞いたことがあります。もちろん、常に交渉があるわけではなく、定型的な契約はひな形を使うことが多いですが、M&Aなどの大きな案件では交渉に行くこともあります。

岡本：私たち若手は、最初に担当するのは契約書チェックなどの基本的な業務が多いです。これはどの企業でもそうでしょうが、法務パーソンとして絶対に経験しておくべき仕事です。組



大澤文人

織として法務部門はどの企業でも共通の機能を果たしてはいるものの、企業や事業内容によって、その機能のどの部分に重点が置かれるか、という強弱があるのは事実だと思います。

Q 2 法務パーソンってキャリアパスが狭まって聞きますが、実際どうですか？

Xさん：ロースクール出身や弁護士でないと出世できないとか、新卒で法務部門に入っても本当に活躍できるのかな、といったイメージが強いです。実際はどうなのでしょう？

内田：そのイメージ、よくわかります。たしかに「弁護士資格がないと上には行けないのか？」という話題が出たことはありますね。でも、法務部門長や法務担当役員になっている方で資格を持っていない人もたくさんいますよ。

大澤：本当に多いですね。もちろん資格がある方もいますが、必須というわけではありませんし、実際の業務や昇進スピードに大きな差は感じません。むしろ、当社の法務室は多種多様なバックグラウンドを持つ人が集まっていて、それが強みになっています。

岡本：そうですね。経営陣から見ても、経験や実績が重要であり、資格の有無は二の次だと感じます。むしろ、自社のことを深く理解してい



岡本 力



内田一伸

る人のほうが、昇進しやすいという見方もできます。

内田：法務パーソンの転職はそれなりに多いです。異業種からでも法務職として十分に通用しますし、異業種への転職もハードルは高くありません。むしろ、自分のスキルや経験の幅を広げるよい機会にもなりますね。

大澤：最近取締役も多様性が重視され、法的リスクを評価できる人材が求められているため、法務部門出身者が取締役や執行役員になるケースも増えています。社外取締役としても、弁護士資格者や法務がバックグラウンドの人が選ばれる機会が増えました。法務部門での経験を活かして、ESG 推進や内部統制といった経営の隣接部門への異動も多いです。

Q3 法務部門の仕事って「地味」で「内向き」なイメージですが、「面白さ」や「やりがい」はどんなところにありますか？

Xさん：率直な疑問として、法務部門の仕事の「面白さ」や「やりがい」はどんなところにあるのでしょうか？

Yさん：私のイメージでは、法務部門の仕事は「守り」と「攻め」の両方があると思っています。守りの面では内部統制やコンプライアンス管理、契約書審査などがあり、攻めの面では大型契約

への関与や M&A、スキーム構築があるのかなと。

内田：そのとおりです。契約審査でリスクがある場合は、ただ「ダメだ」と突っぱねるのではなく、「どうすればできるか」という具体的な代替案を出して交渉します。相手が納得しない場合も、どうすればリスクを減らしてビジネスを前に進められるか、アドバイザー的な立ち位置でありつつも、ビジネスの当事者として考えます。最終的なビジネス判断は経営陣が行いますが、私たち法務部門は、そのための材料や判断軸をしっかりと提供し、意思決定に貢献しています。

大澤：私が担当した案件で一番印象に残っているのは、店舗の屋根に太陽光パネルを設置するプロジェクトです。関係者が多く、契約スキームの組成から承認まで2年以上かかりました。

複雑な交渉や調整を経て、大きな案件が無事にまとまった時の達成感は格別です。営業職のように「物を売る」というわかりやすい成果ではありませんが、会社の大きな意思決定に深く寄与できるときに、大きなやりがいを感じます。

岡本：私自身も、新規事業の立ち上げに一から関わって、最終的に事業化のために別会社として分社化された時は、大きな達成感がありました。BtoC 向けの新サービスで自分が作った利用規約が世の中に公開された時は、成果が目に見える形で実感でき、面白かったです。

内田：私も似たような経験として、過去、新事業の開発プロジェクトに法務として関わっていました。事業化まではできませんでしたが、自分が入社を決めたきっかけにもなった案件で、スタートアップとの提携や技術ライセンスなど、法務としてサポートする中で、「自分がこのプロジェクトを支えているんだ」と感じられるのは本当に誇らしかったです。

外部との契約交渉では、相手方の法務部門と「どう着地させるか」を一緒に考えたり、ときには本音で語り合えたりすることもあります。国や企業によって交渉スタイルも違うので、そうした「文化の違い」を体感できるのもこの仕事の面白さの一つですね。

Q 4 法改正への対応や AI 活用など、常に勉強が必要そうですが、どう対応していますか？

Yさん：法改正も頻繁にありますし、新しい知識をキャッチアップし続けるのは大変だと思います。AI やリーガルテックの活用状況も気になります。

大澤：法務パーソンは法律の改正や新しい判例、業界動向を常に追いつける必要があります。私は社外セミナーや勉強会に積極的に参加したり、大手法律事務所のニュースレターなどを活用したりしています。

岡本：当社でも、業界団体からの情報や法律事務所のニュースレターを活用しています。法務部門の中で、週に一度、ミーティングやチャットツールで、「こんな改正があった」、「こういう判例が出た」と情報共有し、必要に応じて社内の対応方針をすり合わせています。自分で調べて持ち寄る力は、法務パーソンとして非常に重要です。

内田：法律事務所のニュースレターに登録しておく、法改正や重要な判例がすぐにわかりますし、社内の定例会でも情報を共有しています。

大きな法改正があれば、Teams などでも速報を流すことも増えました。実務にどう活かすかをみんなで相談しながら対応しています。

大澤：AI やリーガルテックも積極的に活用しています。AI を使った契約書の一次チェックツールは、リスクの洗い出しや抜け漏れの指摘ができるようになり、精度も高まっています。今後は契約書の初期審査は AI でほぼ済むようになるでしょう。

岡本：AI やリーガルテックで定型作業は効率化され、AI を使いこなすことで、法務部門の仕事の幅が広がると感じています。それでも、役員との調整や「ここだけの話」といった経営判断は、人でなければできないため、現時点で「法務部門の仕事が AI に全部置き換わる」といった心配はしていません。

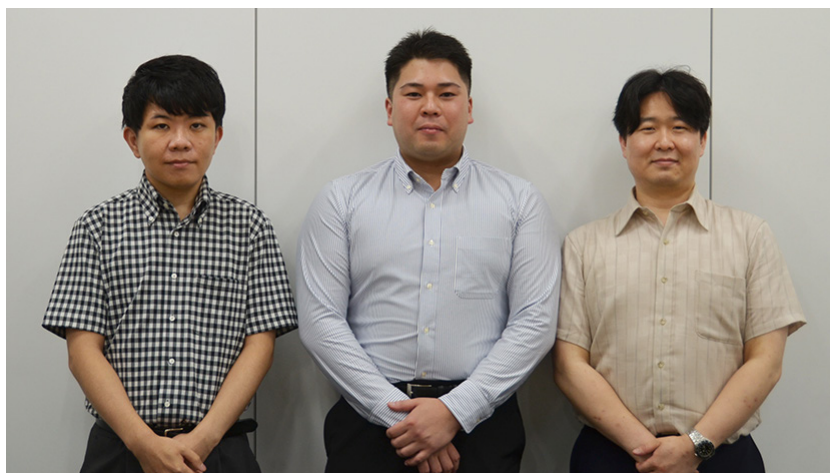
内田：以前、AI 契約書レビューを導入したことがありましたが、当時の技術では「指摘が多すぎて逆に面倒」ということもありましたが（笑）。ただ、今後は生成 AI などの進化で、より実務に即したサポートができるようになると思います。最終的なビジネス判断や経営への提案は、まさに人間の仕事として残る部分ですね。

Q 5 法務部門って「特別な人向け」の部署って印象ですが、どうしたらもっと身近になると思いますか？

Xさん：やはり学生の間では、「法務部門は難しそう」、「法学部やロースクール出身じゃないと無理そう」というイメージが根強いです。どうしたら法務部門を目指す学生が増えると思いますか？

内田：原因の一つは、企業側の「宣伝不足」が大きいと思います。実際には経済学部や商学部出身の法務パーソンも多いですし、理系出身者が活躍できる場面もあるのですが、それが十分に伝わっていません。

当社では社内では法務部門の堅いイメージを変



えるために、法務部門による社内研修で動画や寸劇などユーモラスな取り組みもしていますが、外部からのイメージも変えるために、社外にももっと発信していく必要があると感じます。

大澤：大手企業は法学部やロースクール、弁護士資格者の採用を強調しがちですが、実際には新卒で法務部門に配属されるチャンスも増えていますし、多様なバックグラウンドの人が活躍しています。もっと幅広い学生に「法務パーソン」というキャリアがあることを知ってもらう努力が必要ですね。

岡本：企業説明会や就活イベントで、法務部門の仕事について詳しく聞けないことが多いという声も聞きます。人事担当者が総合職の話をするだけで、法務部門単独でのアピールが少ないのかもしれません。だからこそ、法務部門が集まる合同説明会や、現役の法務パーソンがキャリアや普段の仕事を語る機会を増やすことが有効だと感じます。

業に深く関わるダイナミックな仕事で、幅広いキャリアの可能性があるとわかりました」、「もし就活前にこうしたリアルな話を聞けていたら、もっと積極的に法務部門を志望したかもしれません」といった感想をいただきました。

一方、法務パーソンたちも「自分たちの仕事の魅力や多様性を、もっとわかりやすく伝える努力が必要だと痛感しました」と、企業法務についての情報発信の重要性を再認識する貴重な機会となりました。

企業法務は、もはや「守り」だけの存在ではありません。事業とともに成長し、経営を支え、ときには世界を相手に交渉する、ダイナミックで知的なプロフェッショナルの世界です。この対話が、未来の法務業界を担う学生の皆さんにとって、その奥深い世界への扉を開く一助となることを願っています。

（うちだ・かずのぶ
おおさわ・ふみと
おかもと・りき）

座談会を終えて——対話で見た、企業法務の新たな可能性

座談会を終え、学生のお二人からは、「法務部門は専門職で閉じた世界ではなく、会社の事